『戦後処理魔法少女みあれ』

保坂　歩

■浅草・街中
賑わう人々の中、板チョコ片手に歩く復員スーツ姿の青年・カーター。
T『昭和二×年　東京・浅草』
■川沿いの古アパート・外観
ドンドン叩かれている玄関のドア。
カーター（声）「おい、いるんだろう、みあれ！」

■同・ワンルーム室内
カーター（声）「開けるぞ！」
ドアを開け、カーターが入ってくる。
瞬間、苛立ちに顔が歪むカーター。
和室の奥、雰囲気に似合わぬソファー。
ゆったりと背を預けながら、体を寄せあって眠っている二人の少女。
一人は、長い黒髪の少女、みあれ。
一人は、短髪で男装の少女、和子。
カーター、無言で持っていた板チョコを投げつける。
頭に直撃するみあれ、「ぐあ」と声をあげて目を覚ます。
みあれ「……カーター？　何の用……？」
カーター「任務があると言っておいただろう」
みあれ「ああ、今日だったかしら……ふああ……」
気怠そうなみあれの横で、和子も目を覚ます。
和子「なんだい、みあれ……もう少し君の隣で夢を見させてくれよ」
みあれ「残念ながら仕事の時間みたい。貴方はそのまま寝ててもいいわ、和子」
和子「……仕事か。ならば僕も付き合おう」
伸びをする和子。
カーター「やれやれ……毎度のことながらごっこ遊びじゃないんだぜ」
カーター、懐から封筒を取り出す。
その表面には『連合国軍最高司令官総司令部一任』の文字。

カーター「我々、進駐軍<ＧＨＱ>の仕事は」
×　×　×
封筒の中の手紙を読んでいるみあれ。みあれ「『人を攫う巣鴨の妖怪』……これまた時代錯誤ね」
和子「文学にしてもやや古臭いなあ」
カーター「あくまでも現場の証言だ。実際に幼児の誘拐事件も多発している。戻ってきた幼児もいるようだが――」
×　×　×
イメージ。
夜道を、何者かの白い影に誘われて歩く子ども。
×　×　×
カーター「誘拐当時の記憶がなく、気づけば自分の部屋で休んでいたそうだ」
みあれ「典型的な神隠し案件ね、この国の言葉で言えば」
和子「この国の言葉で言えば……ってことは」
みあれ「ええ、和子。私の領域にある事件かもしれないわ。相手次第ではあるけれど」
カーター「どちらにせよ、進駐軍に報告する必要はある。他に頼る者もいないからな」
みあれ、面倒そうに頷き。
みあれ「この妖怪が、新しい『処理対象』というわけね」

■巣鴨・地蔵通り商店街
Ｔ『巣鴨』
関心なさそうに歩くみあれと、周囲に目を取られながら歩く和子。
和子「巣鴨は新しいものこそ無いけれど、本邦的な美しい街並みだよね。一句詠みたくなるなあ」
みあれ「（微笑み）和子はどの街に来ても、落ち着きが無いわね。感性が豊かだとも言えるけれど」
和子「ふふん。俳人見習いだからね。興味を持った風景は、きちんと目に焼きつけるのさ」

みあれ「まったく、男装の俳人などこの国では早すぎるわね」
和子「それで？　現場はこの辺りなのかい」
　和子とみあれ、路地に入っていく。
　その先には複数の長屋がある。
みあれ「ええ――この近くよ」
　三人の子ども達がかごめかごめをして遊んでいるが、その唄はマザーグース。
みあれ「連続神隠しの中心は」
少年Ａ「姉ちゃん達、がいじんー？」
みあれ「ふふ……そのようなものね。私の家族は『お雇い外国人』の一人だったの」
少年Ｂ「お雇い外国人？」
みあれ「ラフカディオ・ハーンやジョサイア・コンドルのように、ね。この国に住み続けることを選んだ、ちょっと昔の異人」
少年Ａ「ふーん。そっちの姉ちゃんは？」
和子「うえ。僕が女だってわかるのかい」
少年Ａ「わからあ。顔が綺麗すぎるもん」
和子「う……き、綺麗な男の人だって今ドキ珍しくないよ？」
みあれ「（流して）みんなに『噂』の話を聞きたいの」
少年Ｂ「噂って……ああ、Ｃのやつが家出したってやつとか？」
少年Ａ「あー。騒ぎになってたあれなあ。でもＣ、夜には戻ってたんだろ」
和子「はは。ただ門限破っただけに聞こえるね」
みあれ「……そういう子ども達が複数いるのかしら？」
少年Ａ「うん。夜までは、どんなに探しても見つからないのにひょっこり戻ってくるんだってよ」
少年Ｂ「見つかってないやつもいるって聞くけど」
みあれ「……その子達が戻ってきた、正確な時間はわかるかしら？」
少年Ａ「そんなんおぼえてねーけど……俺が

飯食ってる時に帰ってきたらしーから、8時ぐらいじゃね？」
みあれ「そう……ありがとう」
少年Ａ「（真っ赤になり）！」
少年Ａの額に、優しくキスをするみあれ。
少年Ｂ「わ！　ずりー！」
和子「まあまあ、接吻なら僕がしてあげるよ」
少年Ｂ「そっちの姉ちゃんのは性癖変わるからやだー！」
和子「ええ……確信があるのかい……」

■長屋・室内
一人、鍋を洗っている少年、トシオ。
奥のほうでは、布団の中で母親が席こんでいる。
声「お邪魔していいでしょうか」
トシオ「は、はい？」
扉が開く音。
トシオが見ると、外の光を帯びながらみあれと和子が入ってくる。
二人の美貌に圧倒されるトシオ。
みあれ「失礼いたします。私はみあれ・フルエフル。こちらは田中和子と申します」
和子「よろしく少年！　家事ご苦労様っ」
トシオ「え、あ、はい？」
みあれ「貴方が、神隠しから帰ってきたと聞いて。話をうかがいに来ました」
トシオ「ああ、またそのこと……いいけど、母ちゃん寝てるから短めでいい？」
みあれ「勿論。貴方のお名前は？」
トシオ「トシオ」
みあれ「トシオさん。貴方が隠され、戻ってくるまでの間――覚えていることはある？」
トシオ「……あるよ。ちょっとだけは」
和子「誰かに攫われた、という記憶があるのかい」
トシオ「うん。でも、相手の顔を覚えてないんだ。それどころかそれが、男だったのか、女だったのかも……」

和子「性の在り方に自由な誘拐犯か。これでは僕に疑いの目が向くよ、みあれ」
みあれ「ないわ」
和子「ないかな」
みあれ「ではトシオさん。その、『ちょっとだけ』残った記憶の話を、私に教えて下さる？」
怪訝そうにしながらも、みあれを見上げトシオ。
トシオ「……誰かに声をかけられて、それから家に帰ったまでの時間は……まるで、夢の中みたいでさ」
× × ×
イメージ。
雲の中のような不思議な空間、朦朧とした顔で浮かんでいるトシオ。
× × ×
トシオ「ずっとここにいてもいいかなって……思えるぐらいだった。うち、貧乏で特にこの先いいこともなさそうだし」
みあれ「だけどお母様を一人、置いてはいけなかった」
トシオ「な……なんでわかるの？」
みあれ「トシオさんの目が優しいから」
トシオ「……！」
和子「こらこらみあれ。この少年が純情に見えるのならば、誘惑はよしたまえ」
みあれ「本音を伝えただけなのだけれど。夢見心地にありながら、母を想えるなんてとても素敵だわ」
トシオ「そ……そんなんじゃないけど。でも、帰らなきゃって強く思って……そしたら、家の前に立ってたんだ」
みあれ「（頷き）懸命ね。現実のアンカーが身近にあることは幸福だわ……けれど、そうではない子どももいる」
トシオ「（驚き）ね……姉ちゃんどこまで知って……」
みあれ「帰って来ていない子もいる。狭い町内、そんな子達の事情はトシオさんも知っ

ているのではなくて？」
トシオ「……あいつらは……」
和子「あいつらは？」
トシオ「帰りたく……ないんだ。こっちにいると……殴られるから」
怪訝そうな和子、みおれは切なげに目を細める。
みあれ「やっぱり、そういうことね。最後に――トシオさん。攫われたとき、不思議な声がしなかった？」
頷くトシオ。
トシオ「うん、聞こえた。扉を叩く音がして、それから……」
トシオ、扉のほうをじっと見て。
トシオ「『こども達、寝たかい。もう８時だよ』って」
にっこり微笑むみあれ。

■路地裏（夜）
薄暗い外灯に照らされた長家街、人の気配はない。
闇の中をゆっくり進む、真っ白なモヤのようなもの。
モヤは次第に、小さな人のような姿を為していく。
声「現れたわね、巣鴨の人攫い妖怪」
モヤを見つめているのは、みあれ。
みあれ「いいえ――妖精『ウィー・ウィリー・ウィンキー』」
モヤはスコットランド風のオシャレな寝間着に身を包んだ、小さな人の姿に。
白目しかない異様な顔で、みあれを見つめ返す。
ウィリー「……！」
怪訝そうなウィリー。
みあれ「『マザーグース』でも歌われるスコットランドの眠りの化身。夜８時に現れ、子どもが寝たかどうかを確認する……」
ウィリー「……」
みあれ「ふふ。ちゃん付けしたほうがよかっ

たかしら？　この国の言葉風に」
ウィリー「私が……見えるのか……？　大人であるお前が……」
みあれ「あら、こう見えて乙女なのよ？　それは冗談として、異国での人攫いは感心しないわ、ウィリー」
ウィリー「……」
みあれ「それが貴方の性質だとしても、不法滞在の怪奇を――『彼ら』はそれを由としない」
ウィリー「違う……私は……」
みあれ「そうね……生まれた土地ではしなかった行動もしている。貴方は、誘拐をするタイプの妖精ではなかったはず」
ウィリー「お前……どこまで……」
　ウィリーの背後、現れる和子。
　拳銃を構えている。
和子「子どもの眠りを確認して、夢の世界に誘う。それだけが君の役割だったのだろうけれど」
ウィリー「……！」
みあれ「この街では――眠りから帰りたくない子どもが多すぎた。戦争が、人々からゆとりを奪ってしまったから」
ウィリー「それも……知っているのだな……」
みあれ「貴方は、子どもを誘拐しているのではない。夢の世界に誘った子どものほうが、夢から出ることを逃避しているそうね」
　がっくりと肩を落とすウィリー。
ウィリー「……そうだ。子どもを８時には眠らせ、朝には現実に戻す。それが私の役割だったのに――」
　ウィリーの周囲、白い霧のようなものが。
　その中に、小さくなった子ども達が浮かんでいる。
　皆、膝を抱いて自分をかばっているよう。
ウィリー「この子達は、実の親に殴られ、蹴られ、犯されていた」
みあれ「……児童虐待、ね」
和子「……君がもたらす夢が、彼らに逃げ場

を与えたんだね」
ウィリー「この子達を……返すわけにはいかない……この子は、夢を望んでいる」
みあれ「しかしそれでは、根本的な解決には至れないの。それに貴方は、違法滞在者――新しい秩序を求めるこの国には――」
みあれ、ウィリーを冷たく睨み。
みあれ「邪魔な『処理対象』」
ウィリー「う……うぐぐぐぐぉぉぉ！！」
唸るウィリー、突然体が肥大化。
みあれ以上に巨大な、怪物と化す。
ウィリー「わ、私はこの国から出ない……私の国では、鉄を燃やす工場によって私の居場所はなくなった……」
和子「だから密航したのだね。妖怪が未だ住むこの国に」
ウィリー「そうだ……私はここで、求められている。子どもが健やかに眠れるように！」
ウィリー、勢いよく和子のほうへ。
刹那、引き金を引く和子。
無数の銃弾がウィリーの体に食い込むが、ウィリーは立ち止まるだけで致命傷は負っていない。
和子「ふむ、通常兵器では無理なようだよ、みあれ」
みあれ「……ふぅ。すんなりいくとは思ってなかったけれど……しょうがないわね」
みあれ、脱力しながらも、脇から古い杖を取り出す。
ウィリー「き、貴様……魔女か!?」
みあれ「いいえ、その呼び方はもう古い――祭儀人形杖<ウィッカーマンハンド>！」
瞬間、杖が広く展開。
みあれ「我に、大いなる女神ウトゥルス＝フルエフルの鎧を与えよ！」
無数の肋骨にも似た杖の先が、一気にみあれの全身を貫く。
ウィリー「……！」
傷ましそうに見ている和子。
泣きさけんでいるみあれ、その体が次第

に血のような赤をベースとした、ドレス状の姿に。
みあれ「私達は今後、こう呼ばれなくてはいけない――『魔法少女』と」
みあれ、杖を振り下ろす。
猛烈な暴風が発生、ウィリーは後ずさり。
ウィリー「『魔法少女』だとぉ……？」
ウィリー、全力で腕を振り上げ走りだす。
ウィリー「そんなものが！　子どもに夢や勇気を与えられる私に勝てるかぁぁ！」
強大な腕力で、肩を掴まれるみあれ。
みあれ「違法行為で守られても、子どもは嬉しくないのよ」
微動だにしないみあれ。
ウィリーがその力に戦慄していると、みあれが両腕を開く。
あっさりと引き剥がされるウィリー。
ウィリー「う……うおおお!?」
くるくると、バトンのように杖を回転させるみあれ。
みあれ「戦きなさい、古き者。輝く近代化の光に包まれながら」
杖から、まばゆい光が輝く。
ウィリー「うわぁぁぁぁぁぁ!!」
すさまじい光の中、消えてゆくウィリーの姿。
みあれ「戦後処理、完了」
同時に、杖が一気に体から引き剥がされるみあれ。
全身から血を流し、その場に倒れ――
――そうになるところを、和子が抱える。
和子「相変わらず痛そうだね、『闇の戦後処理』の仕事は」
みあれ「（息を切らしながら）これが……私達魔女が……魔法少女として生きることを許される、条件だから……」
和子「（悲しそう）……本当に、進駐軍は残酷だよ」

■みあれの回想

数年前の満州、収容所の牢獄。
手枷をつけられ、捕まっているみあれ。
その虚無の表情。
突然、牢獄の扉が開けられる。
扉の向こう、みあれを見つける和子の姿。
みあれ、無感情に見つめ返す。
和子「関東軍の者だ。無罪の『魔女』を釈放しに来た」

■みあれのアパート（翌朝）
敷き布団の上、ハッと目が覚めるみあれ。
みあれ「！」
傍らに座り、みあれの額の汗をふいていた和子。
和子「目が覚めたかい」
みあれ「……子ども達は」
和子「親の元に返したよ。『無事』にね」
みあれ「……そう」
和子「いきなり進駐軍に押し入られたもんだから、みんな脅えていたそうだよ。しばらくは落ち着くんじゃないかな」
みあれ「どうかしら……妖精の役割を歪めるほどの彼らが、ね……」
和子「……心配はわかるけど、それはもう君の仕事じゃないだろう」
みあれ「ええ、私は裏切り者。国を失い、家を失い旅するすべての存在にとって」
和子「……そんな言いかたはやめなよ。僕は『女』から逃げて、こうして君に出会えた運命に感謝しているんだから」
みあれ「そう言ってくれるのは、和子だけ……魔女を生かそうと言ってくれた……」
みあれ、和子の手を握って、頬を擦りよせる。
和子「そうだよ……一緒に生きるべきなんだ。君や僕も、近代の中で」
みあれ「本当に……いつ訪れるのかしら。この国の、本当の近代は……」
淋しそうに窓の外を見るみあれ。
遠くの工場、煙突から煙が高く高く上が

っている。